

氏名(本籍)	やま だ まさ ひろ 山 田 真 裕 (北 海 道)
学位の種類	博 士 (法 学)
学位記番号	博 甲 第 1,059 号
学位授与年月日	平 成 5 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 1 項該当
審査研究科	社 会 科 学 研 究 科
学位論文題目	自民党代議士の集票システム：橋本登美三郎後援会、額賀福志郎後援会の事例研究
主 査	筑波大学教授 政治経済学博士 蒲 島 郁 夫
副 査	筑波大学教授 中 村 紀 一
副 査	筑波大学助教授 辻 中 豊

## 論 文 の 要 旨

本論文は、後援会に代表される自民党代議士の集票システムの事例研究である。本研究では、自民党一党優位体制を支える下部構造として後援会をとらえ、その組織、動態、集票機能を分析している。

本論文の構成は 3 部 8 章から成り、第 1 部「理論と方法」、第 2 部「事例研究」、第 3 部「結論」となっている。各章の内容は以下の通りである。

第 1 章「先行研究の意義と問題」では、クライエントリズムの視角から見た後援会論、後援会＝疑似集団論、地方議員の後援会、代議士後援会と地方議員の関係などについての内外の文献をサーベイし、これまでの後援会研究が一般化への志向が薄かったことを指摘している。

第 2 章「分析枠組みと研究戦略」では、一般化を目指して、代議士の集票のありかた全体を集票システムとして概念化し、その構造を外部環境、資源、戦略の関数として説明している。

第 2 部「事例研究」では、上記の分析枠組みを用いて、橋本登美三郎とその後継者である額賀福志郎の後援会のケース・スタディを行った。両者とも茨城 1 区から選出された自民党代議士である。分析では、書籍、新聞、関係者へのインタビュー、選挙データなどが資料としてふんだんに用いられている。

第 3 章「西湖会システムの発生」では、橋本が政治家を志し、自己の集票システムを組織し、それが一応の完成を見るまでの間を分析の対象としている。本章の分析から、橋本の集票システム(西湖会)が地域的連帯に依存して発生し、その後、総選挙における当選によって利用可能な資源を増大させ、組織化を進展させていったことが明らかになった。またここでは、選択的誘因の拘束力などから見て、西湖会システムの維持や拡大に用いられた権力は、支配の側面が弱い説得的権力であ

ると主張している。

第4章「西湖会システムの制度化と蹉跌」は、橋本が大臣等の要職を歴任し、政治家としての地位を上昇させていくことに伴う西湖会システムの構造の変動と、ロッキード事件への関与に端を発する西湖会システムの衰弱の過程を分析している。本章の分析から、西湖会システムがその制度化に伴い、内紛や閉鎖性を見せ「利益のシステム」としての性格を強めていき、中央政界での地位低下に伴い選挙で弱くなっていったことが明らかとなった。

第5章「世代交代：西湖会システムから福志会志へ」では後継者決定から福志会システムによる西湖会システムの継承とその確立の過程を分析している。本章の分析に見られるように、橋本を中心とするエゴ・ネットワークから発生した西湖会システムが、後継者の決定及び総選挙にあたって、積極的に活動したことは擬似集団の利益集団化を示すものである。

第6章「福志会システムの構造、資源、戦略」においては、額賀福志郎の集票システム（福志システム）についてその構造、資源、戦略を分析している。

第7章「総選挙得票結果の分析：選挙地盤と得票動態」では、橋本と額賀の集票システムが実際の選挙においてどのような得票結果（パフォーマンス）を導き出したかを分析している。その結果、彼らが当選を重ね政治家としての地位を向上させるに伴い、得票地盤への依存が弱まっていくことが明らかになっている。

第3部「結論」では、「結論と含意」が述べられている。分析の結果、代議士後援会を中心とする代議士の集票システムは、発生段階においては集合的誘因と社会運動型の参加に多くを依存する「連帯のシステム」としての性格を強く持つが、その成長や制度化に伴い専門家型の参加や選択的誘因に多くを依存する「利益のシステム」としての性格を強めることが実証された。

## 審 査 の 要 旨

### (1) 論文対象の重要性及び有意性

本論文は自民党代議士の後援会の一つに焦点をあてた実証的研究である。後援会は日本の政治システムにおいてとりわけ選挙過程において極めて重要なインプットメカニズムの一つを形成している。また、日本の政党システム内部における重要なサブシステム、もしくは媒介システムとして日本の民主主義制度の運営を考える上でも不可欠の存在である。にもかかわらず、山田氏も指摘するように既存研究の蓄積は極めて乏しく、日本政治過程研究の失われた環の一つを形成しているといってもよいだろう。それはいうまでもなく、後援会の持つインフォーマリズムの表れの一つである。日本においては、政治過程や権力過程の重要な集団や組織体ほどこのインフォーマリズムの壁に阻まれ、その実態を知ることは難しい。その意味で、有力な自民党政治家橋本登美三郎の後援会の発生、制度化、蹉跌そして次世代の政治家額賀福志郎の後援会への変容と発展をとらえたこの研究は、その研究焦点の適切性、有意性によってまず評価されるべきである。

### (2) 洗練された研究方法

次にこの研究は方法的意識をしっかりと持った研究であり、理論に基づく事例研究である点で高く評価できる。山田氏は、基本的な方法的態度として自省的機能主義を援用する。社会学者今田高俊氏の自省的機能主義を政治システム論に読み代えながら構造におけるパターンとルール、機能におけるパフォーマンスとコントロール、意味における差異と自省という記述概念としての側面と説明概念としての側面を意識的に用いながら、構造、機能、意味の3つを後援会の事例研究において巧みに結び付けている。そのことはとりわけ後援会システムの変動と次世代の政治家への後援会の変容を分析する際に適切なものとして表れている。

より具体的な方法モデルとしては、パネジアンコの政党の発生、制度化、成熟モデルを利用しそれを操作化している。この援用も適切であり、日本における集票モデルと他の国々における集票システムの比較可能性を念頭においた努力の一つといえるだろう。

### (3) 記述の豊かさ、計量分析の適切さ

本論の主題を成す後援会、西湖会及び福志会の両者に対するインタビュー、新聞等の一次資料、内部文書に基づいた記述は、先の方法的意識に助けられて説得的なものとなっている。このような当事者の貴重な証言や丹念な一次資料の収集に基づく記述は、これまで現代日本の政治組織の分析において稀なものといえるだろう。地盤の継承、地盤の住み分けに関するRS指数の算定やグラフを用いた計量分析も適切であり、説得力がある。これによって後援会制度の発展の様子が計量的に表現されているのである。以上の3点から、本論文は博士学位に相当する価値を持つものと考え得る。以下補足的に本論文に残された課題を指摘しておきたい。

### (4) 残された課題

第一に、日本の集票システムの一つである後援会、さらにその後援会の一つである地方政治家型の一後援会が取り上げられた訳だが、このような分析に先立ってたとえ不十分な研究蓄積とはいえ、一定の類型学、少なくとも分類学がなされる必要があったように思われる。そのような中のひとつとして、仮想的に位置づけながら詳しい事例研究が成されるべきであったように思われる。第二点として、そのような集票システム一般との比較分類学の形成の過程で、利益集団システムとの比較が成されるべきであったように思われる。第三に、後援会システムの発展にとって極めて重要な役割を果たしたであろう選挙制度についての分析、中選挙区制度との関連があまり成されていないのは残念である。第四点としては、比較集票システムの研究を念頭においた本論文は、ヨーロッパ型の政党を中心とした集票システム、アメリカの個々の候補者を中心とした集票システムにたいして、たとえ二次文献を中心としてであれ一定の参照があってよかったように思われる。最後に、自省的機能主義を読みかえいわば自省的政治システム論の立場は極めて魅力的であるけれども、本論文でのその取扱いはやや表面的であるように思われる。今少し構造的なこの方法的態度、枠組みの取り入れが考えられるように思われる。

よって、著者は博士（法学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。